

幼児の言語表現の芸術品, 北原白秋編『日本幼児詩集』について

— 幼児の言語表現を豊かに育む環境と人間関係の成果の結晶 —

和田 典子

要旨

2017年、幼稚園教育要領の改訂、保育所保育指針の改正により、子ども達は、日々の生活の中での感動を、自分なりの言葉で表現し、伝え合い、共感し合う活動を通して、豊かな感性や表現する力を養い、自分から事象や自然や友人や社会に関わっていく意欲を育み、創造性豊かに育っていくことを望まれ、保育者や教育者には、それらを上手に育てていくことが求められている。この盛りだくさんな要求に現場の保育士、幼稚園教諭は、この「豊かな感性や表現する力」「創造性を豊かにする」という言葉をどう解釈し、実践すれば良いか、日々悩み、格闘している。そして、研究機関であり教員養成校の大学研究者も同じ悩みを抱えながら、研究や教材開発に取り組んでいる。

その手がかりの一手段として、かつて、幼児の言語表現に着目し、本来ならば幼児の片言として消えてしまっていた言葉を探集して、芸術品にまで高めた『日本幼児詩集』を軸に、当時一流の詩人であり童謡作家の北原白秋が、魅せられた幼児の言語表現とは何だったのかを分析し、幼児の言語表現の特色や法則性、そしてその発想の豊かさについて考察した。また、この幼児詩集が出来上がるまでの行程での子どもと保育者の人間関係や、子どもを取り巻く環境がいかなるものであったかを調査し、今後の参考に資したいと考える。

キーワード：『日本幼児詩集』、北原白秋、幼児の言語表現、人間関係、環境

1. はじめに

保育所保育指針(2017年改正)¹⁾の「言葉」では、3歳までに「言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」、「表現」でも「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことが、目標・内容に掲げられ、3歳以降になると(幼稚園教育要領²⁾も同じ文言)、「環境」では「身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分から関わろうとする意欲を育て…」とあり、「言葉」の「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」と、連動した保育内容を目指してしている。

つまり、子どもは、日々の生活の中での感動を、自分なりの言葉で表現し、伝え合い、共感し合う活動を通して、豊かな感性や表現する力を養い、自分から事象や自然や友人や社会に関わっていく意欲を育み、創造性豊かに育っていくことが望まれ、それを上手に育てていくことを、保育者や教育者は求められている。この盛りだくさんな要求に現場の保育士、幼稚園教諭は、この「豊かな感性や表現する力」「創造性を豊かにする」という言葉をどう解釈し、実践すれば良いか、日々悩み、格闘している。そして、研究機関であり教員養成校の大学研究者も同じ悩みを抱えながら、研究や教材開発に取り組んでいるのが現状であろう。

ここに、北原白秋(1885年-1942年)の編集による日本最初の幼児の詞華集である『日本幼児詩集』がある。これは、幼児の無邪気な片言を周囲の大人が聞き逃さず、その思いに共感して、書き留めた記録であり、幼児の天性と記録者の愛情の結晶とも言えよう。この分野の開発により、何気なく見過ごされがちな幼児期独特の発想や語彙の発達が記録され、後に幼児童謡や幼児教育に大きく影響を与えた。

本稿は『日本幼児詩集』を軸に、当時一流の詩人であり童謡作家であった北原白秋が、魅せられ、収集し、詞華集編纂まで為した、その幼児の言語表現の魅力とは何だったのかを分析し、幼児の言語表現の特色や法則性、そしてその発想の豊かさについて考察した。また、この幼児詩集が出来上がるまでの、子どもと保育者の人間関係や、子どもを取り巻く環境がいかなるものであったかを調査し、今後の参考に資したいと考える。

『日本幼児詩集』の先行研究は、上笙一郎「〈幼児詩のポエツたち〉 - 『日本幼児詩集』とその周辺 -」³⁾に、詩を掲載された幼児の周辺事情が詳らかにされている。また、同論文掲載の北原隆太郎、関口安義編『自由詩のひらいた地平』-『白秋がえらんだ子どもの詩』別巻⁴⁾自体が、白秋編の『日本幼児詩集』『鑑賞指導 児童自由詩集成』⁵⁾『児童詩の本』⁶⁾の復刻に付けられた別巻解説である故に、本研究に大きな示唆を与えてくれた。

『日本幼児詩集』の概略は『赤い鳥事典』⁷⁾の項目「日本幼児詩集」(和田典子)で知ることができる。

児童詩研究は、そう多くはないものの弥吉菅一『日本児童詩教育の歴史的研究』⁸⁾の大著を筆頭に、児童文学研究からも、国語教育からもアプローチされている。しかし、幼児詩の研究は、幼児の表現がいわゆる「口言葉」による表現であるため、多くの保育者や親たちが微笑ましく聞くものの、そこに児童詩のような価値を求めることなく過ごしてきたため、非常に少ないと言えるだろう。戦後、幼児童謡の普及によって、幼児性や幼児の言語表現の研究も出てきた。それでもなお、幼児の表現した言葉に最初に芸術性を見出し、それらに付けられた北原白秋の解釈と鑑賞を超えるものを知らない。

一方、現在、幼児の表現のおもしろさに気づいた一部の大人が、自己の作品(例えば童謡や詩)に取り上げているのが散見され、今後への新たな展望となるであろう。

2. 『日本幼児詩集』とは

『日本幼児詩集』とは、詩人で童謡作家でもある北原白秋編集の豪華な詞華集で、昭和7年(1932年)4月15日に采文閣から出版された。所収作品は、大正11年後半期から昭和6年前半期に子ども雑誌『コドモノクニ』に投稿された作品の中の優秀作品に、単行集から選抄したものを加えた385篇(作品頁434頁)から成る。これに、白秋の解説「幼き者の詩」が添えられている。

装釘および挿画は、当時一流の装釘家として既に名を成していた恩地幸四郎(1891年-1955年)の手による。表紙は子どもの成長をモチーフとした細密な図柄の銀箔押し、天金の豪華本である。

豪華な内容を具体的に述べるならば、『赤い鳥事典』⁹⁾には「書誌事情」として、

装釘：恩地幸四郎による。表紙、背、裏表紙を濃い赤の木綿で包んだクロス装。表紙、背に銀箔押し絵。天金、上ちりにも金。花布は朱色。見返しは、無地で白濁オレンジ色。

挿画：本扉はフルカラー、銀粉の透き紙に編者、題名、名、絵を挟み、出版社名が記されている。黄土色のデザイン枠囲み。この枠のモチーフは、総ての挿画に使用されている。序の扉は「幼き者の詩」の文字と黄土色のデザイン・ラインの2色刷り。

本文は、年齢別に中扉があり、2色刷。

と説明されている。(写真1参照)



写真1
『日本幼児詩集』表紙
恩地幸四郎装釘
(初版本(1932年)を筆者撮影。あえて右上カットで掲載)

年齢別に章分けされ、章ごとに中扉があり、代表する詩に相応しいカラーの扉絵が描かれているのも、当時の詩集としては贅沢なことである。

このような豪華な詞華集が編まれたのは、白秋が、幼児たちを一人前の天才詩人達として認め、最高の礼を尽くしたからに他ならない。

3. 『日本幼児詩集』が編まれた経緯

大正7年に発行された『赤い鳥』は、創刊号に創作童謡や各地童謡(わらべ唄)の募集を出し、その選者は北原白秋であることを告げた。その後、白秋は鈴木三重吉の勧めで、童謡を書くばかりか、一般からの地方童謡や創作童謡の募集にも積極的にかかわり、その選者となるなど、熱心にこの新しい試みに取り組む。やがて、童謡の投稿作品の中に、子ども自身の生活実写の作品があるのに気づき驚いた。子どもの創作する童謡は大人の真似の域を出ないものであったのに対し、生活の中での感動を綴った子どもの詩は「自然観

照の正確さに於いて成人をも凌駕し」(北原白秋「幼き者の詩」より)、澆刺としたものであった。白秋は、その芸術性を認め、『赤い鳥』誌上で推奨した。そして、取りあえず「少年自作童謡」欄として発表し、1921年11月号から「児童自由詩」の呼称を用いた。「自作童謡募集」から「児童自由詩募集」に至るまでの白秋の心の葛藤を野口茂夫は、『北原白秋と児童自由詩運動』¹⁰⁾の中で、次のように説いている。

- ・これらの作品は、童謡というより、子どもたちの自由な発想と自由な表現による自由詩であった。そしてその後も、このような作品が次々と現れて白秋を感動させた。これこそが子どもたちの詩ではないか、と白秋はそのつど推奨したりもしたのだが、といて、折角の童謡欄を消滅し去る気には容易になれなかった。とつおいつ、といつか気持ちが、白秋の胸を、長いこと去来したのではなかっただろうか。(傍線：筆者和田)
- ・白秋は早くから、子どもたちの童謡作品のマンネリズムには気づいていた。しかし、いつも数は少くとも幾つかのすぐれた作品に、むしろ白秋自身が励まされて、童謡への情熱を掻き立て続けた。

白秋は、児童自由詩の生活に根ざした言葉や表現の澆刺とした生命のほとばしりと叡智に気づき、驚き、感嘆した。これらの新たな芸術を見出しつつも、既にある童謡欄の消滅を気にして逡巡する白秋の心境が良く解る。「とつおいつ」というのは、「迷いながら行うこと」の意味であるが、野口は、当時の白秋の心境を、長いこと迷いの中にあったと捉えているのである。

童謡誕生以前に、少年詩欄は、他の有名雑誌にもあり、結局それを真似る結果に成はしないかという懸念や、それとは別の芸術性の高い少年詩欄に成長させたいという思いもあったのだろう。

後年、『鑑賞指導 児童自由詩集成』の「解説」で白秋は次のように書いている。

- ・(児童の作品に接した白秋は：筆者註) 児童本然の感動のリズム、その自由律の形式を以て現れた作品に接し、…略… 驚き、喜んだ。
- ・彼等は全く日本詩壇の自由詩運動を知るところなく、自らに彼等の自由詩を澆刺と生み出したのである。
- ・児童作品欄を設け、その投書を^{しょうよう}逡巡した。その後、之等の作品の中、特に秀抜なるものは推奨作として大いに優待するところがあった。此の一事から、その後個人の投書よりも、各小学校の一括した投書となって激増し、…略…(ルビ、傍線：筆者)

このような過程を経て、従来は捨て置かれてきた子どもの天心地な感受性、自然と口を突いて出てくる言葉に秘められた詩魂をすくい上げ、「児童自由詩」として詩の体系の中に置いた。白秋の鋭敏な詩心に慈しみ育まれて宝珠となった作品群は、昭和8年(1933)10月に『鑑賞指導 児童自由詩集成』と、昭和18年(1943)4月に『指導と鑑賞 児童詩の本』(帝国教育界出版部)に纏められた。

その過程で、傍線Aにあるように、『赤い鳥』の募集には、学級単位、学校単位での応募となり、「指導教師」の存在が浮かび上がってくる。児童の場合、教師の指導があったのに対し、幼児の場合は、その言葉の記録にあたって、白秋は「一切の大人の手を加えること」を強く禁じていた(後述)。この扱いの違いについては、留意しておきたい。

一方、愛児隆太郎と童子の成長と言葉の発達を目のあたりにした白秋は、日々直面する新しい発見の中から、彼等の無邪気な言葉の中に、自然な律と音楽性、そして詩魂を発見した。それらを日記に付け記録するように、と妻に言った。それらは「坊やの言葉」としてカタカナで記録された。白秋は、その記録の中から「これぞ」と思う作品に、私注を付けて、折々に発表していったのである。

このような、文字を持たない幼児の言葉を記録する運動は、世間の親や保育者にまで請い求められた。特に絵雑誌『コドモノクニ』の読者の家庭でも広く実行され、幼児の創作作品が、次々と雑誌投稿され、推奨作品として掲載された。

『コドモノクニ』は、大正11年(1922)、東京社から創刊された幼年向けの月刊絵雑誌であり、編集顧問に倉橋惣三が就き、監修した。内容も、童話・童謡・劇・音楽(楽譜)・踊りと多岐にわたり、誌面も斬新であった。吉田公子は「子ども達に本物を、芸術性高きものを」¹¹⁾の中で、「絵が生き生きと歌いだすかのような誌面は、二歳から六歳の子どもの心に如何に響いたか想像すると、心が躍るようだ。」と、誌面の躍動感を語る。

一方で、編集顧問の倉橋は、母親に向けて「お子様におあたえになる前に、お母様方の一応お目を通して頂きたい。」と前置きして、私共は広く一般のお子さんに通ずる、教育といふことしか考へることしか出来ません。しかし、この雑誌がそれぞれのご家庭に於いて、それぞれ違った境遇や性質のお子さん方に際して、最も適切な教育的効果を期し得るためには、どうしても、お母さん方のお心遣ひに待たなければなりません。¹²⁾

と、個々の家庭に相応しい教育的な協力の期待を求めた。その根本には、子どもの個性に合わせた『コドモノクニ』の活用法を望み、親子の共用の時間を大切にしてほしいという教育的配慮に溢れていた。

ただし、これら個性を重視した教育を甘受できたのは、大正デモクラシーを背景に中産階級が生まれ、教育熱心な家庭も増えてきた時代であったとは言え、経済的ゆとりのある家庭の子どものみであったことは、心に留め置かなくてはならないことである。

話を、『コドモノクニ』への幼児詩の投稿に戻すが、特選作はカラーの挿絵付きで推薦発表されたので、幼児の言葉を記録する運動は広まり、遠く海外からの投稿もあった。こうして、『コドモノクニ』誌上で発表された、特選作と佳作の10年分に、個人詩集からの選抄を加えて編輯されたのが、『日本幼児詩集』であった。

幼児の言語表現に着目して書き留めるといふ小さな出来事を、中産階級の教育熱心な家庭に呼びかけ、文学運動として盛りあげ、その集大成として発行された詩集が『日本幼児詩集』であったと考えられる。

4. 『日本幼児詩集』の構成と内容

『日本幼児詩集』は、①白秋の序文(「日本幼児詩集」の序文と考えられる)(Ⅲ～Ⅹ頁) ②「改題」(Ⅺ～Ⅻ頁) ③「幼き者の詩」再録(3～38頁) ④「日本幼児詩集」作品(43～434) ⑤「目次」(巻末に置かれ索引にも使える)の5つの部門から構成されている。

白秋の「幼き者の詩」は、『女性改造』(大正12年(1923年)5月号)に掲載された再録である。白秋の作品鑑賞を伴った幼児詩論であり、作品解説や成立事情も備えているので、「日本幼児詩集」の実

作品を読み解く鑑賞の指標としても大いに参考になる。

本編の「日本幼児詩集」は、2歳3歳、3歳、4歳、5歳、6歳、7歳、8歳以上と年齢別に配列され、七章から成る。各章の始めに中扉が付き、絵と題名が記されている。絵は作品の挿絵とも取れるので、匹敵すると思われる作品の一部を紹介する。(/ は改行を表す。別記のないかぎり絵と詩の題は同じ)

2歳3歳の章は「月と乳」と題されている。匹敵する作品を紹介する。

「ママのおつぱい」

ママのおつぱい、／お月さまのやうなおつぱいだね。

あすこに見える／お月さまのやうなおつぱいだね。

小田原 北原隆太郎(北原白秋の長男：筆者註)

3歳では「太陽さん」(章題と作品名は同じ)

緑と赤だ。／ 太陽さんかしら。／ 林檎だ。林檎だ。／

林檎だ。林檎だ。／ 林檎だ。

小田原 北原隆太郎

4歳では「驢馬の色」

チンドン屋が広告配つて行つたよ。／

広告の紙にね、／ 驢馬が車ひてる絵があるのよ。／

驢馬の色白いね、／ 広告の紙が白いからなのよ。／

広告の紙が赤ければ／ 驢馬も赤くなるね。／

広告の紙が青ければ／ 驢馬も青くなるね。／

僕 驢馬大好きよ。

東京 生方宏

5歳では「お花が揺れる」

お花が揺れる。／ お花が揺れる。／

お花の中を、／ お花の中を、／ お花を摘んで、／

通ります、／ 通ります。

神戸 福永サヤカ

6歳では「火は生きてゐる」

母さん／火は生きてゐるもんだね。／

パチパチとお手々をたたいて、／ ゴウゴウとどなつて、／

火は生きてゐるもんだね。こはいもんだね。

奉天 斎藤晋也

7歳では「雨の葡萄」(章題)

「雨」

雲から、／ ぶだうが／ ぼろぼろ／ ぶつてきた。

奈良 大西淳二郎

年齢別に分類され、幼児の言語発達に即した発話の特色がよく分かる。また、年代ごとに同じ作者の作品が散見されるので成長の跡を辿ることもできる。分析は、次項で。

5. 幼児の言語発達と片言の魅力

白秋は、「幼き者の詩」に「幼児は囁きます そのおほつかな片言のそもそもから、その囁きは、彼等自身の生まれた者の麗質を以てします」「言葉そのものを以て歌ひます」と述べ、幼児達の片言の魅力を賛美し、素直な感動律と表現の自由さに目を見張っている。

幼児達の作品を、言語発達の側面から分析すると、3つの要素が自然に彼等を詩人たらしめているように考えられる。

第1に、一語～二語文期に起こる多義性（一語がさまざまな意味を持つこと）によるもの。1歳前後に、物の名前と抽象的な記号である言葉が結びついて発せられる最初の意味ある言葉を初語という。その後、物の名前と意味を大きなカテゴリーの中で捉えながら、自分の言いたいことを表現していく一語文期が訪れ、多くの単語を獲得していく。例えば、隣のメリーという名の犬を見て「わんわん」と覚えると、4つ足で動くものは「ワンワン」と認知され、次に猫を見たときにも「わんわん」と言う。幼児には犬と猫の見分けが付いており、それが隣のメリーと違うことも解ってはいるが、取りあえず「四つ足で動くもの」というカテゴリーの総称として「わんわん」と表現する。次第に、「メリー」という固有名詞や「猫」もしくは「にゃーにゃー」という言葉も獲得して、それぞれに言い分けられるようになる。しかし、普段あまり目にしないものや、最初に出会ったものは、類似の言葉で代用する。一言しか言えないのであるから、その一言は、状況に応じて様々な意味が含まれている。これを多義性という。

作品例では、前述の2歳3歳の章の「月と乳」も丸いというカテゴリーの中で、月と母のお乳が並立して歌われている。7歳代表の「雨」「雲から、／ぶどうが／ぼろぼろ／ふつてきた。」というのも空から降ってくる丸いものを、既知の「ぶどう」と表現している。他にも詩集の中には「あのね、／坊や田舎に行ったら、／畠に卵がなつたよ。／一つ二つ三つ、／あ、ちがった、／トマトだったよ。」という作品もある。幼児の言葉表現をそのまま書き取るのであるから、ひょっとすると途中で「たまご?とまと?」という大人の問いかけが入ったのかも知れない。いずれにしても田舎に行った感動を伝えたいという気持ちと、既に知っている「たまご」と「とまと」を取り違えて表現してしまい、途中で誤りに気づき、訂正したのである。

幼児は、奇をてらった訳でもなく、新奇な例えを使おうとしたわけでもない。自然な発達の過程として表現された言葉であった。しかし、それらを聞いた大人は、独特の表現や比喩だと解釈し、興味を覚えて取り上げた。

第2に、2語文（主語と述語）を繰り返しながら、自分の確信の持てる語のみを短く言う。例えば「ワンワンいるね／もこもこわんわんね／メリー（犬の名）もこもこね。／くまたんももこもこね。」とリズムカルに繰り返される。隣の犬のメリーも縫いぐるみの熊も、「4つ足」「もこもこ」という同じカテゴリーにあり、それを「もこもこ」という言葉で表現する。幼児は「もこもこ」という新たな言葉を使うのが面白くて表現しただけなのかも知れないが、その表現の手法が、助詞や助動詞が未発達なため、省略されることも多く、それが独特のリズムを生むのである。

3歳の章の「太陽」でも「赤と緑」「円い」というリングの形態から、最初は「太陽さんかしら」といぶかるが、それが「林檎」という名前を持っていることを知り、新たに認知した「林檎」の存在を「林檎だ、林檎だ」「林檎だ」と、名前を連呼することによってその喜びを表現している。

この幼児独自のカテゴリー感覚、感動を短い言葉で端的に表現するリズム感、そして発想の飛躍に、大人は虚を突かれ、それが斬新に思われる。幼児特有の詩心とでも言えようか。

「幼き者の詩」に白秋は「幼児こそ生のままの詩人であるとも云

へます」「求めずして彼等は歌ひ」と賞賛している。

第3に、幼児は同調性を求めながら話すため「～ね」「～よ」という終助詞が付く。これは、白秋の童謡「からたちの花」や「この道」にも見られる表現法であるが、幼児達は図らずも自然に活用していたのである。

これらの、幼児の言語発達に測した自然な表現が、自らを詩人に行っていたのである。

『日本幼児詩集』は、これら以外にも、資料として稀少な記述が残されている。

幼児は、構音器官の未発達により「あるいち」（歩いて）「なあた」（鳴いた）「ちゃかな」（さかな）のように「幼児音」と呼ばれる幼児期特有の発音をするが、それらも聞いたまま訂正されることなく記録されているので、幼児音の例が多数記録されており、興味深い。

また、「あっぷ」（帽子）「とつと」（鶏）「ののさま」（月）などの幼児語（幼児の発音しやすい音を使用した単語）と言われる幼児期特有の語彙があり、取り分け、地方語の幼児語など稀少な語彙を見ることができる。これらの点においても、幼児語彙研究の貴重な資料であると言える。

白秋は記録に際して「いかほど拙く、口調がととのはず、訛が多くても決して大人の手で添削したり、訂正したり、飾つたりしてはならない」¹³⁾と注意している。この注意は再三繰り返されたので、その注意が実行された本書は、ありのままの幼児の言葉として、独特の個性と魅力を持った詩集である。と同時に、非常に貴重な幼児語彙の収集集とも評価できるのである。

さらに、日本国内だけでなく、ホノルル、奉天、台北などからの投書もあり、「ひこうき、ビグひこうき／カム／カム、／オレンジあげる。」（ビグは大きい、カムカムはいらっしやいらっしやいの意味か。：筆者註）のように日本語と外国語が混在している作品もあり、グローバルな世界観を持った詩集ともいえる。

6. 幼児と記録者の人間関係

白秋の息子隆太郎の言葉は、白秋の気づきによって妻の手で書き留められたが、他の幼児の作品も母親、父親、書生、お手伝いなどによって書き留められていた。

中でも優秀作品として選抜された作品と、記録者の人間関係について、詳細を検討すると、共通の状況が浮かび上がった。それは、記録者自身が詩人であったり、短歌や詩に興味のある教養人であったりする場合、あるいは、児童詩欄に投稿して採用されている姉や兄を持つ幼児の作品が高い評価を得ている点である。これは、その幼児が豊かな言葉の環境を持っていたとも言えるだろう。

さらに、幼児の作品は、後に作品集として纏められたり、大人の作品集の一部に所収されて、作品が公表されるという幸運な形で後世に残されているのである。それらの一部を紹介しよう。

白秋の息子隆太郎の作品は、『日本幼児詩集』2歳3歳と3歳の項に各5編ずつ10編、8歳以上の項に3編、合計13編が掲載されている。他にも、隆太郎の詩は、白秋の詩文集『季節の窓』の「隆太郎の詩」、「隆太郎の詩と註」に所載されている。年度を逆順にして『緑の触角』¹⁴⁾にも再録された。これらは母親がカタカナで日記に書き留めたものを、白秋が漢字仮名交じり文に改めたが、その時に手を加えてはいないという。

白秋自身が、幼児の言語表現に着目し、鋭敏な詩人の感性で、幼児の言葉の特色を捉え、既に形骸化した大人の感覚よりも優れた言葉運用のおもしろさ、独自性に気づいたのである。そして、その子どもらしい瑞々しい感覚を大いに育む環境を提供していたと言える。また、隆太郎の言葉を真剣に、愛情深く聞き取った母親の功績も大きい。

白秋の娘であり、隆太郎の妹篁子の作品は、4歳の項に7編所載。その他に篁子の作品は、隆太郎の家庭教師として住み込んでいた与田準一（白秋の弟子。詩人・児童雑誌編集者）の幼児詩に関するエッセイ『幼児の言葉』¹⁵⁾（昭和18年）の後半に纏められている。

他の掲載幼児では、京都在住の耳鼻科の医師で自身も童話作家岩井信実の娘充子の作品は、錚錚たる有名詩人の序文や跋文を持つ豪華本『つぶれたお馬』¹⁶⁾（大正12年）、『波のお馬』¹⁷⁾（昭和2年）として出版され話題を博した。

『赤い鳥』の投稿で頭角を現し、個人詩集『お日さん』¹⁸⁾（大正14年詩火線社）などで知られる海達公子は、『日本幼児詩集』の4歳の項で「お日さん」、その妹通子は、4歳の項で「飛行機」6歳の項で「風鈴」、7歳の項で「りんご」「お正月」、8歳以上の項で「兵隊さん」などが所載されている。幼児ということで年齢的に妹の作品が多くなったと考えられる。おそらく、姉の作品は自己詩集『お日さん』からの選であろう。姉妹の父親海達貴文は白秋の元に居た詩人である。

女流作家石丸喜世子の三男創造の作品は、母とお守りだけの筆記である。母親喜世子のエッセイ『子ども愛の生活』¹⁹⁾（昭和4年）や父親石丸梧平と母親の共著『子どもの創作と生活指導』²⁰⁾（昭和7年）にも作品が多く紹介されている。

『日本幼児詩集』には名前が見えないが、関連事項として記しておく、大阪船場の実業家小林政治の娘園子・千賀子・章子の3姉妹の詩集『星の子ども』²¹⁾（大正11年天佑社）は、姉の園子が4歳の妹章子の言葉を筆記したのを契機に姉妹で詩作し『赤い鳥』に投稿するようになったとして有名なエピソードである。

これらのように、『日本幼児詩集』の編集、及び編集に至るまでの10年間の記録活動が、後に幾つかの幼児の詩集を生み、普通ならば消えてしまう幼児の言語表現を、芸術作品の域にまで高め、詩集となり、概に書く術を持った児童達の詩集の列に加えることとなった。

それは、ひとえに、幼児の眩きに着目した白秋の詩人としての感性の鋭さではあったが、幼児を慈しみ、その幼い眩きに耳を傾け、大人の手心を加えることなく、真実のままに記録した者の愛情の賜であったと考えるのである。

幼児の生活体験のなかでの驚きや感動に共感し得る愛情深い人間関係と、豊かな言葉かけや会話が行われる環境が、幼児を詩人にしたのである。

7. おわりに

幼児の未熟な認知能力による発想のおもしろさや、純粋さが、幼児を天性の詩人たらしめ、言葉の発達によって生じる特色が、幼児ならではのリズムを生み、例外を知らない言葉の運用が斬新な表現として書き留められた。そこには、幼児音や訛りを矯正するなどの大人の知恵が入らない形での記述が実現されていた。幼児を天性の

詩人と認めた北原白秋に同調して、幼児の心を素直なままに慈しみ、生活体験や感動を感性豊かな言語表現として受け止めて記述して作品として残した人々の営為を称えたと共に、そこに溢れる人間関係や言語環境を尊しとして学ぶ姿勢が、現在にも必要であろう。

幼児がのびのびと発言し、それを聞いて貰う楽しさを享受できる人間関係や環境の構築は、現在の保育所保育指針や幼稚園教育要領の目指すところでもある。

加えて、これらの片言を記述し、投稿した人々が、当時高級雑誌であった『赤い鳥』の購買層たるブルジュアであったこと、また『コドモノクニ』の読者であるという教育熱心な家庭でもあったことは留意しなくてはならない。これらの雑誌には、一流の作家や詩人による童話や童謡が掲載され、斬新な絵が豊富に描かれていたのである。つまり、当時はあまり普及していなかった芸術的な絵本の代わりとして、それらの本を見、美しい日本語によって綴られたお話を、ふんだんに読み聞かせてもらえる環境に、幼児は居たということである。これらの豊かな環境にいた子ども達の自然な発話が、記録されたのである。その点に関し、白秋も「幼き者の詩」に

幼児のすぐれた詩のあるところには、その保育者達の優れた愛情と詩魂と教養とが常に満ちてゐる訳であります。さうした環境そのものが恵まれてゐるのであります。

と、保育者の「愛情と詩魂と教養」に満ちあふれた環境の賜であると説き、人間関係や環境の大切さを説く。しかし、さらに論を進めて

（児童詩において）貧しい家庭の児童も光るべきは光り進むべくして進みつつある。（傍線：筆者）

ことを認め、これは幼児においても同じであり、「さうでない（豊かな環境に恵まれない：筆者註）幼児に一倍の関心と愛憐とを掛けている」と述べる。

幸いなことに、現在の子供達は貧富の差なく美しい絵本やおもしろいお話を甘受できる環境にある。できるだけ多くの豊かな環境と、幼児の言葉を受容する人間関係が必要であることは言うまでもない。毎日の小さな積み重ねが、幼児の言語表現を豊かにし、感性を磨きあげていくのである。

子どもの心を受容し、小さな発話に耳を傾ける行為こそが、幼児に発話の自由を与える。幼児の片言だと聞き流さずに、時には書き留めてあげることも、幼児の気持ちや言語表現を丸ごと受け止める態度として、その感性を刺激する援助法の一つではないかと考えられる。

大きな愛情の中で自由に表現できる子どもは、やがて、さらなる創造の世界に羽ばたいて行けるであろう。

それには、保育者の心の余裕と時間が必要ではあるまいか。白秋の言う保育者の詩魂とは、自然の音に耳を傾け、風を感じ、幼児と共に詩人になることである。

引用参考文献

- 1) 「保育所保育指針」厚生労働省 引用は『幼稚園教育要領解説』（2018）附録 フレーベル館
- 2) 「幼稚園教育要領」文部科学省 同上
- 3) 上笙一郎（1994）「〈幼児詩のポエツトたち〉 - 『日本幼児詩集』とその周辺 -」北原隆太郎、関口安義編『自由詩のひらいた地平』

- －『白秋がえらんだ子どもの詩』別巻 久山社
- 4) 北原隆太郎, 関口安義編 (1994)『自由詩のひらいた地平』－『白秋がえらんだ子どもの詩』別巻 久山社
 - 5) 北原白秋 (1933)『鑑賞指導 児童自由詩集成』アルス
 - 6) 北原白秋編 (1943)『指導と鑑賞 児童詩の本』帝国教育会出版部
 - 7) 赤い鳥事典編集委員会編 (2018)『赤い鳥事典』柏書房
 - 8) 弥吉菅一 (1989)『日本児童詩教育の歴史的研究』全3巻 溪水社
 - 9) 和田典子「日本幼児詩集」(2018)『赤い鳥事典』pp.415-418
 - 10) 野口茂夫 (1997)『北原白秋と児童自由詩運動』興英文化社 p.68
 - 11) 吉田公子 (2012)「こども達にほんものを, 芸術性たかきものを－『コドモノクニ』と倉橋惣三－」『絵が歌いだすワンダーランドコドモノクニへようこそ』多摩美術大学美術館
 - 12) 倉橋惣三「お母様方へ」『コドモノクニ』雑誌カタログ pp.84-85
 - 13) 北原白秋解説「幼き者の詩」(1932)『日本幼児詩集』
 - 14) 北原白秋 (1929)『緑の触覚』引用は『北原白秋全集』巻20
 - 15) 与田準一 (1943)『幼児の言葉』第一書房
 - 16) 岩井牟子 (1923)『つぶれたお馬』此村欽英堂
 - 17) 岩井牟子 (1927)『波のお馬』叢文堂
 - 18) 海達公子 (1925)『お日さん』詩火線社
 - 19) 石丸喜世子 (1929)『子ども愛の生活』人生創造社
 - 20) 石丸梧平, 石丸喜世子 (1932)『子どもの創作と生活指導』厚生閣書店
 - 21) 小林園子・千賀子・章子 (1922)『星の子ども』天佑社